

月報 岡崎の教育

平成10年度 No.299~310



岡崎市教育委員会

紙面から

教育随想

「往診から学んだこと」

岡崎市教育委員長

杉浦 壽康 氏

この人に聞く

「伊賀川を美しくする会」会長

山崎 光春 氏

特集

「平成十年度学校教育の視点」

師弟同行

山浦 昭雄・山本 頼永

フォト・ヒストリー岡崎の教育

修学旅行（昭和二十九年）

4月号

平成10年4月1日

発行／編集

岡崎市教育委員会



(花を見ながら一斉下校—六ツ美西部小)

私が医院を開業して間もない頃、ある病児の家へ往診したことがある。かなり重い麻疹（はしか）に罹ったが、麻疹は既によくなくなっており、本来なら元気になっていてもよい筈なのに、少しも咳がよくならない状態であった。通院可能な病状であったが、何故か往診をしたのである。病児が起居している部屋へ案内され



て気付いたのは、部屋の通風、陽当たりが悪く、部屋一面に絨緞が敷かれ、冬であったので暖房が入って部屋の中の空気は乾燥していた。これでは気道の炎症はよくなり咳も続くであろうと思ひ、陽当たりのよい、換気が充分できる部屋に病児を移して下さいとお願いした。数日後、咳が嘘のように少なくなると母親が

笑顔で子供を連れて来院したのを今でも覚えている。大学病院に勤務していた往診をしたことのなかった私に、医療における往診の意義を教えもらった事例であった。

登校拒否の子供の相談に際し、私は親から子供の生育歴と家庭環境を詳細に話してもらった。なにも興味本位に聴いているのではない。繰り返し返

— 教育随想 —

往診から学んだこと



岡崎市教育委員会
教育委員長
杉浦 壽康

し、しつこく尋ねているうちに、自分が、子供の成長にどのような影響を与えてきたか親自身が気付き、その上で親自身の子育てに関する意識の変革がなされ、それと共に子供が変わって行くと考えているからであり、事実そのような事例が多いのである。医療において、病気の原因究明や、治療方針を立てるのに患者さ

んの生活史と現時点での生活環境や考え方を知らることが大変役立つのである。

学校教育も医療と同じではないだろうか。子供の生育歴や生活環境を充分に把握し理解しておく必要がある。短時間で、しかも通り一遍の形式的な家庭訪問によつて、どのくらい子供の事を把握・理解できるのだろうか。子供を理解し、子供の声に耳を傾け、共感し、子供が抱えている問題に真剣に取り組まなければ、いじめも、登校拒否も、校内暴力そして少年が起すいろいろな事件も、決して後を絶つことはないであろう。子供と接するのが、教室で授業する時だけでは、教科教育は可能であっても、人間形成のための真の意味での教育はでき得べくもないと考える。

教育が人を創るといふ原点に立つて、学校が中心となり、家庭・地域と一体となつて教育の在り方を、今こそ真剣且つ早急に考え、実践に移さなければならぬ時期である。百年後の子孫に、本当に住みよい平和な地球を遺すために。

(すぎうら としやす・小児科医)



僕たちのカレーライス

野外活動指導員

河合 美智代

「先輩の先生から、山の学習では炊飯活動がいちばん大変だと伺っているのですが、実は今からの炊飯指導がうまくできるか心配です。」

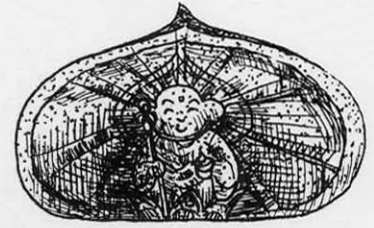
そんな胸の内を話された若手女性教師のK先生。飯ごうやなべを使つての炊飯経験が少ないK先生の不安な気持ちがよく伝わってきた。

しかし、いざ炊飯活動が始まってみると、K先生の心配をよそに子供たちはとてもはりきっていた。額に汗を浮かべてまき割りをする子。煙で染みだした目をこすりながら懸命に火を起こす子。お米を研ぎに水場へと急ぐ子など……。どの子もが、楽しんで生き生きと動き回っていた。これは、学校での十分な事前指導（役割分担・仕事の手順など）の成果ともいえよう。

やがて、子供たちの労作ともいえ

ふるさとシリーズ

この人に聞く



「伊賀川を美しくする会」会長

山崎 光春 氏

四月といえば桜。伊賀川は、桜の名所として、岡崎市民によく知られている。その流域三十町の町民でつくられている「伊賀川を美しくする会」という団体がある。河川美化団体としては全国で初めて結成されたものであり、会長の山崎光春さんのお宅は伊賀八幡宮の近くにある。会長になられて十年目を迎えられる山崎さんに、会の発足当時の様子からお伺いした。

「この会は、昭和四十七年にできたんです。そのころはあまりにも伊賀川がきたなかつたので、川を

きれいにする会をつくつたらという事になったんです。伊賀川沿いの各町の総代さんに声をかけて始めたんですね。そして、第一回の総会を広幡小学校の南にある観音寺でやつたんですけど、それがそもその始まりです。」

山崎さんはさらに話を続け、当時のご苦労について、次のようにしみじみと語られた。

「最初は清掃活動が中心だったんですけど、この川にはありとあらゆるものが落ちていたんですよ。伊賀川をゴミ捨て場と勘違いしているぐらいにね。自転車だろうが、オートバイだろうが、電化製品であろがみんな捨てていく時代があつたんですね。それを市の行政側とタイアップして、掃除をしたのが始まりでした。」

約二十年間にわたって、この川ぞらいをはじめ、堤防の草刈りや河川パトロールなどの奉仕活動を中心となつて続けてこれ、今では、昔の清流を取り戻すことができたそうである。

最後に、この会の行事の一つである「川まつり」について話してください。

「毎年、川まつりを行っているんで

す。魚を増やす意味もあるんですけど、子供に少しでも川になじんでもらおうと思つてね。小さな鯉を三万匹ぐらい放流して、子供たちに捕まえさせるんですよ。魚が住んでくれることがいちばんうれしいですからね。」

目を細めながら、熱っぽく話をされる山崎さんの姿に、ボランティア一途に取り組む決意をされた力強さを感じた。

建設大臣賞をはじめ、数々の榮譽を受けられたこの会が、今後ますます発展していくように、地元民ならずとも協力していきたい。

氏名 やまざき みつはる
生年月日 昭和五年八月二十九日
住所 伊賀町東郷中八十二



るカレーライスが、一輪のリユウノウギク（野菊）と共に食卓に並べられた。K先生も交えての食事である。「先生、僕たちのカレーおいしい。」K先生の顔をのぞき込むようにして一人の男の子が聞いた。

「うん、おいしい。とってもおいしいよ。最高だねこのカレー。みんなよくがんばつたね。」

子供たちの労をたたえるようなK先生のこの一言と満面の笑みで、そこにいた子供たちの顔が一斉にほころんだ。K先生の優しい笑顔と一言が子供たちに自信を与えたのだ。

また、K先生の表情からは少し前までの不安が消えていた。そして、子供たちと一緒に自然の中でしか味わうことのできない食事を、存分に楽しむことができたようだ。

この炊飯活動を通して子供たちは、友達と協力しあつて目的を達成させたことの喜びと、一人ではできなくてもみんなまで知恵を出し合えば、いろいろなことが解決できるのだということを実感したのである。

【推薦する専門書】

『野外探検大図鑑』

小学館

『リーダーのゲーム指導法』

遊戯社



学校教育の視点

—平成10年度—

今日、我が国の教育は高齢化、少子化、国際化など様々な課題に直面しており、二十一世紀に向けて新しい教育の在り方が問われ続けている。

私たちはこうした社会状況の中、地域の特色や児童生徒の実態を的確かつ迅速にとらえながら、一人一人の個性や創造性の伸長を図るとともに、社会全体との連携の中で心の豊かさを育んでいくことが、当面の大きな課題である。

一 学ぶ喜びを知り、自ら学ぶ態度を育てる

児童生徒は、だれもが分かりたい、できるようにになりたいという欲求を持っている。自らの力で、問題が解決できたとき、大きな喜びを感じ、自信を持って次の活動へと発展させるものである。教師は、児童生徒に学ぶことの楽しさや成就感を体得させ、自ら意欲的に学ぶ態度を形成させるために、次の二点に留意して指導したい。

第一は、児童生徒の強い問題意識に支えられた授業展開をすることが大切である。そのために、児童生徒

の関心や意欲を把握し、新鮮で感動を与える教材の発掘・選択及び提示方法、体験学習の導入、意欲的に追究し続け、仲間とともに解決し合う学習展開など、児童生徒の実情に即応した単元の構想が望まれる。

第二は、基礎的・基本的な知識、技能を定着させるとともに、自らの力で解決する過程を通して学習の仕方自身に付けさせることである。このことは、児童生徒たちが自己実現を図り、生涯にわたり人間としての成長と発達を続けていく基礎となるものである。そのために、基礎・基本となる内容を明確にし、学ぶ側に立った授業への転換を図らなければならない。また、個性を生かし伸ばすために、ティーム・ティーチングをはじめとする個に応じた指導方法を充実させる必要がある。

二 生命を重んじ、礼節を尊び、 おぼい 怒やる心を育てる

今日、物質面の豊かさに引き替え心の貧しさや道徳性の欠如が叫ばれている。また、命の大切さを再認識させる事件も発生し、大きな社会問題になっている。この現状を踏まえ、



学校教育に求められているものは、知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成である。各学校においては、児童生徒の優れた能力を伸ばし、個性豊かに、自ら社会の変化に対応していく力を養うことである。

また、児童生徒の人格形成は、学校教育に負うところが大きい。岡崎の教師は、教育者としての使命を自覚し、全校一致の指導体制のもと敬愛の情で結ばれた師弟関係を確立することである。

「教育は人なり」
学校・家庭・地域が一体となって、児童生徒の心豊かたたくましい人間形成を目指し岡崎の教育の創造に努める。

指導の重点

- 一 学ぶ喜びを知り、自ら学ぶ態度を育てる。
- 一 生命を重んじ、礼節を尊び、怒おこやる心を育てる。
- 一 自らを律し、たくましく生きる力を育てる。

「命」と「礼節」を重点に、学校教育全般にわたって、心の教育に取り組まなくてはならない。

教師と児童生徒及び児童生徒相互の望ましい人間関係が存在しないところに真の教育効果は期待できない。こうした関係をつくるために、「挨拶」「返事」などの励行と「怒やりの心」を育成したい。心の通った明るい挨拶・返事や、他人を気づかい、他人の気持ちになって考え行動する習慣の形成は、人間的なふれあいを深め、信頼関係を築くものである。

また、豊かな心を育むために、児童生徒の心に響く体験活動や国際理解を通じた学習を重視することも大切である。

三 自らを律し、たくましく生きる力を育てる

急激な社会情勢の変化の中にあつて、家庭、地域社会の教育の在り方が問われている今、自分を律し、たくましく生きていく力を培う必要が生じている。

その第一は、基本的な生活習慣の徹底を図ることである。集団生活を

していく上で必要な基本的なことを、繰り返し指導し身に付けさせたい。また、事ある度に善悪の根拠を論ずることも忘れてはならない。その体得及び体験の過程で、自己の規範が芽生え、自立の心が育つていくものである。

第二は、ねばり強く困難に立ち向かう力をつけることである。恵まれた生活環境の中で、耐え忍ぶ経験が少ないだけに、たとえ失敗しても挫折することなく、最後まで挑戦する粘り強さ、たくましさ自身に付けさせなくてはならない。このことを、一人一人に即して具体的に目標化し、あらゆる教育活動において児童生徒の日々の姿を注意深く見守り、達成できるよう力強く支援したい。

「教育は人なり」

岡崎の教師は、児童生徒への深い愛情と教育者としての強い使命感・責任感を持ち、たくましい行動力・実践力により児童生徒の健やかな成長を図らなくてはならない。全校一致の指導体制のもと、家庭・地域との連携を密にして、岡崎の教育の創造に全力を傾注したい。



好きになること

梅園小学校

鈴木 理栄子

四月は出会いの季節。

前年度に受け持った子供たちとの別れの後には、新しい出会いが待っている。

新しいクラスは、十一名。

落ち着きのない五名の男子と少し大人びた六名の女子。昨年受け持った子供たちの弟妹が六名おり、当然私に関する情報も仕入れていた。

「先生、しゃれ言ってる。」

そこで、とっておきのしゃれを言ってみた。当然笑い起さるはず。しかし、子供たちは、ぼかん。昨年の子供たちだったら、ここで突っ込みが入り、もっと盛り上がっていかはすなのにと考えた。

こうして五年生の子供たちと新学期がスタートしたのだが、今までのように子供たちの中にとけこめない自分に、

少しずつ焦りを覚え始めた。そうなる授業もなかなか盛り上がりがない。何とかしなければと思い、学級通信に飾らない自分の思いを書いてみた。するとI子が、

「先生、お兄ちゃんのときも怒れたとか、悲しいとか書いていたよね。」

と言った。そうだ、いつも子供たちと真正面からぶつかり合っていくのが私のやり方だった。なのになぜか、遠慮をしていた。

それからは子供たちとの距離が急速に縮まった。肩を抱いて大笑いし、ときには真剣にしゃり。今、この子供たちが好きでたまらない。

(前常磐南小学校)



師弟同行



白墨の文字あざやか

六ツ美北中学校

山本 頼永

「ローマは一日にして成ら

ず」、先生が最初の授業で黒板に書かれた力強い文字は、四十年の時空を越えて、今なお私の中で鮮やかによみがえります。

先生に初めてお会いしたのは、東加茂郡足助町の中中部学校(現足助中学校)で、英語の教科担当としてご指導いただいたときでした。

当時は、スリムな新進気鋭の先生でしたが、温厚なお人柄、物腰柔らかなお話しぶりは、私たち生徒にベテランの風格を感じさせ、安心できました。

先生は教室に入られると、いきなり黒板の中央にくっきりとことわざを書かれました。そ

して英語学習の基本として日々

の努力の必要性を説かれたように思います。なぜか黒板の文字だけは、強烈な印象となって記憶に残っています。

その後、英語に興味を持ち、先生顧問の「ECC」という文化クラブにも入りました。先生は在職中、幅広くごけん

さんを積まれ、教育者として多大なご功績を残されました。かつての不出来な生徒は、

はからずも後輩として同じ道を歩いています。いつまでもお元気で指導してください。

生徒のよき理解者に

前ハートピア岡崎所長

山浦 昭雄

「Rome was not built in a day」

これは若い頃の私が、四月の授業初めに必ず生徒たちに教えたことわざです。あなた

は、そのことをよく覚えていてくれましたね。感激です。

三十数年前、当時はまだ学級の定員数が多く、一クラスに五十人近い生徒がいたように思います。その中でもあなたのことは忘れていません。

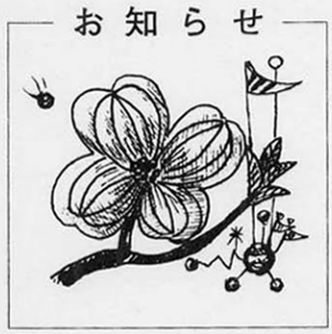
当時はオーラル・アプローチのはしりで、新教材の導入に英語だけを使って生徒たちに理解させようと、苦心さん

たんの毎日でした。そんな教師への助っ人があなただけでした。下手な英語の意味を推測し、質問によく答え

てくれましたね。頼永さんは、IQが高いばかりでなく、EQも高い生徒でした。

教師は、自らを踏み石として生徒を自立させる職業。その意味で「絶えざる自己否定の仕事」と私は認識しています。卒業させたら、すっぱり

生徒を忘れ去るのが常でしたが、あなたは例外の一人です。今、子供たちが大変悩んでいます。頼永さん、あなたの叡智と包容力をもって、彼らのよき理解者となり「心の病」を癒してやって下さい。



お知らせ

◆期待の新任教員 三十三名

平成十年度岡崎市小中学校
新規採用教員は、三十三名
(男子十四名、女子十九名)
であり、昨年度より四名増加
した。

期待の新任教師の氏名と配
属は、次のとおりである。

・小学校(二十四名)

- 梅園 佐々木 恵
- 原田 康成
- 根石 持木 佐織
- 廣瀬 浩司
- 太田 里英
- 稲前 葉子
- 大久保 和則
- 藤原 千里
- 横井 真紀
- 山田 佳代子
- 鈴木 慎一朗
- 三上 美佐子
- 松下 恵

矢作北 杉浦 露子

太田 奈緒子

神谷 耕一

森 みどり

杉浦 久美子

堀田 史

吉口 枝里

大山 司

前川 亜希子

土屋 洋子

大橋 貴広

美川 林 正彦

南 橋川 友美

河澄 智崇

伊藤 智美

永井 武信

若杉 直人

鈴木 里子

新井 邦仁

松崎 一崇

◆第四回学校学級新聞コンク

ール

・教師の部

優秀賞 城北中教諭 鈴木一生

◆平成九年度県自然環境保護

基金助成

「トンボのすむ街」出版

市教委指導主事(現県教委

義務教育課指導主事)

鈴木 栄二

◆平成九年度読書感想画愛知

県コンクール

優秀賞 北野小四年 杉山 英子

優良賞 竜美小一年 山田 裕貴

井田小三年 佐藤有香里

惠田小四年 市川 久乃

上地小四年 橋本 和紀

井田小五年 柴田理紗子

藤川小五年 佐藤亜沙妃

三島小六年 山本智恵子

南中一年 加藤 千晴

南中二年 数藤 寛子

◆平成九年度岡崎市読書感想

文・感想画コンクール

市長賞(読書感想文)

矢北小一年 大山 拓磨

緑丘小六年 佐々木健雄

竜海中一年 斉藤 晴香

市議会議長賞(読書感想文)

根石小一年 加納 翔

秦梨小五年 本間かおり

河合中三年 由良 佳子

岡崎南ライオンズ賞

(読書感想画)

岡崎小二年 鮫島 弘樹

三島小六年 山本智恵子

城北中二年 大野 全央

◆岡崎市防火作品募集

・ポスターの部

市長賞 城南小四年 近藤 由惟

美川中二年 金澤 晴香

・習字の部

市長賞 常磐小六年 河口 裕美

甲山中二年 山田 素子

◆平成十年度岡教組執行委員

委員長 小林 義孝

副委員長 伊藤 友隆

書記長 加藤 政幸

書記次長 三浦 司

組織部長 今枝 武司

情宣部長 金指 由香里

教文部長 大西 和夫

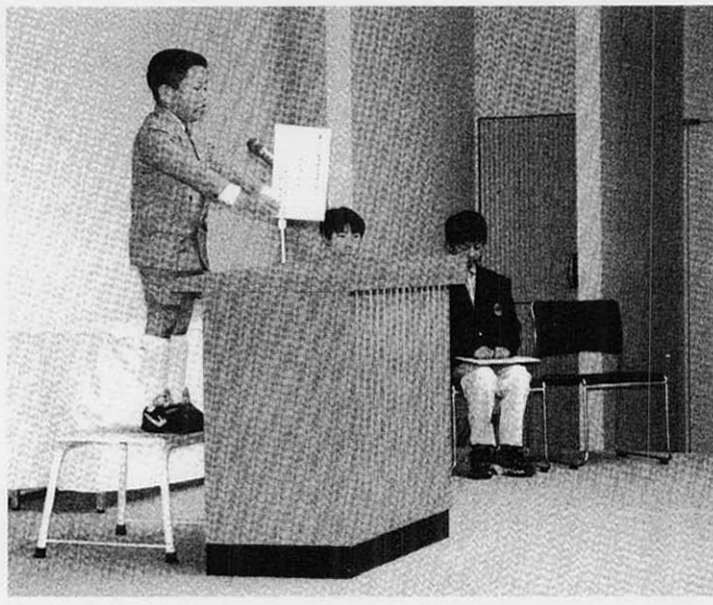
福対部長 中野渡 善樹

調査部長 青山 静夫

会計委員 石原 真吾

女性部長 青山 永子

青年部長 小田 英宣



▲平成九年度岡崎市読書感想文・感想画コンクール表彰式
—優秀作品の朗読— (平成10年2月13日、福祉会館)



フォト・ヒストリー 岡崎の教育

修学旅行 (昭和29年)

・題字 岡崎市 長中根 鎮夫
 ・タイトル 美川 中 杉崎 秀夫
 ・表紙写真 六ツ美西部小 岡部 克彦
 ・カット 六ツ美西部小 山中 武

小学校六年間の学校生活のなかでいちばん心に残った思い出として、卒業文集などの紙面ににぎわすのが、一泊二日の修学旅行だ。戦時中とり止めになっていた修学旅行が全面許可になったのが、昭和二十四年。写真は、その後五年経った昭和二十九年、伊勢・鳥羽方面でのワンショットである。真珠王御木本幸吉の銅像の下での記念撮影である。丸刈り坊主とおかっぱ頭のどの顔も幸せいっぱいといった様子がかがわれる。



写真提供 男川小



- この本を**
- *もどかしい親と齒がゆい若者の国日本 クライン孝子 祥伝社 ¥1680
 - *考えすぎないほうがうまくいく 森 毅 三笠書房 ¥520
 - *ジーコの「個」を活かして勝つ ジーコ ごま書房 ¥1400
 - *学校って、なんだろう 産経新聞「じゅく〜」取材班 新潮社 ¥1300

*檻のなかの子

トリイ・ヘイデン著 入江真佐子訳 早川書房 ¥2000

通常ならば親によって設定されるはずの安全な場が確保されないと、子供は周囲に防壁を巡らして守るしかない。その防壁が、この題名の「檻」なのである。引きこもり恐怖症、緘黙児の15歳の少年、檻のなかの子ケヴィンは、セラピストのトリイによって、この檻から自分を解き放つことができたのである。

トリイ・ヘイデンの、子供たちへの心の交流を描いた作品は、読者に感動を与える。

お花見といえは、まず岡崎公園を思い浮かべる人が多いが、「桜そのものは伊賀川がいちばんきれいですよ」と自信を持って山崎さんは語られた。

お話を聞きすると、さっそく伊賀川に出かけてみたくなった。岡崎の名所を再発見した気分だ。

シダレザクラの花びらを浴びて笑顔いっぱいで登校する子供たち。どの顔も新しい出会いに胸を躍らせ、希望に満ち満ちている。この子らと過ごす一年に思いを巡らせ、新たなファイトが全身をみなぎる。

出会いはいつも新鮮である。

シオ

スア

愛蔵のアルバムを繰って、遠き日々を思いをはせる。小学校の修学旅行写真の中で、奈良の大仏を背にし、友とほほえんでいる自分自身に再会する。

はるかな時を隔てても、今なお鮮明によみがえってくる、修学旅行の風景はいつまでも心に宿っている。

過ぎし日の感傷に浸る間もなく、期待と不安を胸に、新しい世界へ飛び込む。宵のころ、北の空高く上りつめた北斗のひしゃくから、花の香りがまき散らされているかのよう……。そんな心地よい気分で見上げる心のゆとりが、慌ただしい日々にごそ欲しいと思つ。